

## 立ち上がった「専門外」の研究者 コロナ実態解明へ作った仕組み

5/24 毎日新聞

3月下旬にもかかわらず、汗ばむような初夏の陽気だった。タイ・バンコク。広大な自然



高校生の頃にビートルズにはまり、海外の研究者に覚えてもらえるようにと、長髪にひげ、ラフな服装を続ける佐藤佳・東京大医科学研究所教授（右から2人目）＝東京都港区で2025年3月13日、小林努撮影

公園に、その「一行」の姿はあった。土管のような水路の中に足を踏み入れると、ひんやりと涼しい。腰をかがめて10メートルほど進み、天井部分を見つめた。視線の先にいたのは逆さづりになったコウモリ。100匹ほどはいるだろう。

「このコウモリは、新型コロナウイルスの近縁種を保有している可能性があります」

そう話すのは、東京大医科学研究所教授の佐藤佳（けい）さん（43）だ。日本のウイルス研究をけん引する存在だ。

佐藤さんらは地元の大学などと共同で、コウモリを捕獲し

血液や鼻ぬぐい液を採取していた。

新型コロナはコウモリに由来すると言われる。佐藤さんはベトナムや香港、カンボジアなど東南アジアの約10カ国・地域でウイルスの有無などを調べる予定。「さまざまな種類のコロナを観察すれば、その中に新型コロナの起源が含まれているかもしれない」と語る。

パンデミック（世界的な大流行）を引き起こした新型コロナ禍。何らかのきっかけでヒトに感染したとみられ、将来のパンデミックの可能性は十分にある。「起源」を調べるのはその「ネクスト・パンデミック」に備えるためだ。

「専門外」でも…芽生えた思い

1. **新型コロナは2019年末、中国・武漢で確認された。**原因不明のウイルス性肺炎患者が相次ぎ、日本では20年1月に初感染が確認され、翌2月には日本に帰港した大型客船で集団感染があった。

各国は外出制限や都市封鎖などを実施した。**世界保健機関（WHO）は20年3月、パンデミックの状態だと宣言。世界は大混乱に陥った。**

そんな中、各国の研究者は競い合うようにウイルスの実態解明に乗り出した。佐藤さんもその一人だ。

だが当初は「自分の専門ではない」と積極的ではなかった。もともとはエイズウイルス（HIV）を専攻していたからだ。一口にウイルスといっても、HIVとコロナでは性質が全く異なる。HIVは血液などの接触で感染し、症状が出るまで5～10年ほどかかる。一方、新型コロナは呼吸器の細胞に感染した後、数日で高熱や激しいせきの症状が出る。さらにウイルス研究者の間では「自分の専門外のウイルスには手を出すべきではない」という不文律のようなものがあり、佐藤さんはちゅうちょした。

しかし感染者が急増し、病院はパンク状態に。ドラッグストアからマスクが消え、政府

が全国の学校に一斉休校を要請するなど、社会不安が拡大していった。

「こんな状況なのに、ウイルス研究者として何もしなくてよいのか」。そんな思いが大きくなった。

### 未知のウイルス、チームで解明

しかし、である。新型コロナは新しいウイルスで、変異などの詳細は全く分からない。解明すべき課題が山積していたが、当時は日本発の研究（論文）は欧米に比べて少ないと指摘されていた。

「新型コロナを研究する」。そう決断した佐藤さんはウイルスの遺伝子に着目。その性質の解明を目指した。年内に2本の論文を発表し、その後、国の新型コロナ研究に関する大型研究予算に応募して予算を得た。一人で未知のウイルスに立ち向かうのは限界があると思い、「研究者たちが連携して実態解明を進める仕組みが必要」と考えた。



タイ・バンコクで現地調査をする佐藤佳さん。研究室を飛び出し、現地調査に乗り出すとは、新型コロナウイルス禍前には想像すらしていなかった=本人提供

そして翌21年1月。同年代の研究者を集めた「G2P—Japan」を設立。G2Pには「遺伝子情報（Genotype）からウイルスの持つ性質（Phenotype）を探る」という意味を込めた。当時英国で「G2P—UK」という大規模な研究グループがスタートし、それを意識しての命名だった。

HIVを研究していた頃の仲間に声をかけるなどしてメンバーを集めた。だが全員がウイルス専門家というわけではなかった。高い実験技術を持つエキスパート、疑似ウイルス作製の専門家たちが集まった。初期のメンバーはわずか4人だったが「自分たちがやっている基礎研究の知見が社会の要望に直接応えられるケースはめったにない」。そんな思いだった。

感染拡大の中で、変異株が問題になっていた。同年11月、南アフリカでオミクロン株が発見される。「G2P」はその約1カ月後、オミクロン株はそれまでの変異より重症化しにくいことを示す動物実験結果を発表。世界初の発見だった。

佐藤さんとはにかくスピード重視。データがまとめ上げられると、「アンカー役」としてあっという間に文章に仕上げる。ウイルスの変異の速さに負けてははいられなかった。

「G2P」は発足後に50以上の論文を発表した。それまでの常識を打ち破る驚異的なペースだった。【渡辺諒】